

「ええ？ 奥さん、とんだ、おかるだね」

私たちは、声を合せて笑いました。

その夜、十時すぎ、私は中野の店をおいとまして、坊やを背負い、小金井の私たちの家にかえりました。やはり夫は帰って来ていませんでしたが、しかし私は、平気でした。あすまた、あのお店へ行けば、夫に逢えるかも知れない。どうして私はいままで、こんないい事に気づかなかつたのかしら。きのうまでの私の苦勞も、私が馬鹿で、こんな名案に思いつかなかつたからなのだ。私だつて昔は浅草の父の屋台で、客あしらいは決して下手ではなかつたのだから、これからあの中野のお店できっと巧く立ちまわれるに違いない。現に今夜だつて私は、チップを五百円ちかくもらつたのだもの。

「亭主の話に依ると、夫は昨夜あれからか知合いの家へ行つて泊つたらしく、それから、けさ早く、あの綺麗な奥さんの営んでいる京橋のバーを襲つて、朝からウイスキーを飲み、そうして、そのお店に働いている五人の女の子に、クリスマスプレゼントだと言つて無闇にお金をくれてやつて、それからお昼頃にタキシードを呼び寄せさせて何処かへ行き、しばらくたつて、クリスマスの三角帽やら仮面やら、デコレーションケーキやら七面鳥まで持ち込んで来て、四方に電話を掛けさせ、お知合いの方たちを呼び集め、大宴会をひらいて、いつもちつともお金を持つていない人なのにと、バーのマダムが不審がつて、そつと問いただしてみたら、夫は平然と、昨夜のことを洗いざらいそのまま言つので、そのマダムも前から大谷とは他人の仲では無いらしく、とにかくそれは警察沙汰になつて騒ぎが大きくなつても、つまらないし、かえさなければなりませんと親身に言つて、お金はそのマダムがたてかえて、そうして夫に案内させ、中野のお店に来てくれたのだそうで、中野のお店の亭主は私に向つて、

「だいがい、そんなところだろうとは思つていましたが、しかし、奥さん、あなたはよくその方角にお氣が付きましたね。大谷さんのお友だちにも頼んだのですか」

とやはり私が、はじめからこうしてかえつて来るのを見越して、このお店に先廻りして待つていたものように考へているらしい口振りでしたから、私は笑つて、

「ええ、そりやもつ」

とだけ、答へて置きましたのです。

その翌る日からの私の生活は、今までとはまるで違つて、浮々した楽しいものになりました。さつそく電髪屋に行つて、髪の手入れも致しましたし、お化粧品も取りそろえまして、着物を縫い直したり、また、おかみさんから新しい白足袋を二足もいただき、これまでの胸の中の重苦しい思いが、きれいに去られた感じでした。

朝起きて坊やと二人で御飯をたべ、それから、お弁当をつくつて坊やを背負い、中野にご出勤ということになり、大みそか、お正月、お店のかきいれどきなので、の、さつちゃん、といつのがお店での私の名前なのでございますが、そのさつちゃんは毎日、眼のまわるくらいの大忙しで、二日に一度くらいは夫も飲みにやつて参りまして、お勤定は私に払わせて、またふつといなくなり、夜おそく私のお店をいて、
「帰りませんか」

とそつと言ひ、私も首肯いて帰り支度をはじめ、一緒にたのしく家路をたどる事も、しばしばございました。なぜ、はじめからこうしなかつたのでしようね。とつても私は幸福よ」

女には、幸福も不幸も無いものです」

どうなの？ そつ言われると、そんな氣もして来るけど、それじゃ、男の人は、どうなの？」

男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と戦つてばかりいるのです」

「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きとつていきますわ。椿屋のおじさんも、おばさんも、とてもいいお方ですもの」

馬鹿なんですよ、あのひとたちは。田舎者ですよ。あれでなかなか慾張りだね。僕に飲ませて、おしまいには、

もうけようと思つてゐるのだよ。」

「そりゃ商売ですもの、当り前だわ。だけど、それだけでも無いんじゃない？　あなたは、あのおかみさんを、かすめたでしよつ。」

晋ね。おやじは、どつろつろ、氣附いてゐるのさ。「
ちやんと知つてゐるらしいわ。いろも出来、借金も出来、といつかまじりに言つてたわ」

僕はね、キザのようですけど、死にたくて、仕様が無いんです。生れた時から、死ぬ事ばかり考えていたんだ。皆のためにも、死んだほうがいいんです。それはもう、たしかなんだ。それでいて、なかなか死ねない。へんな、こわい神様みたいなものが、僕の死ぬのを引きとめるのです」

「お仕事が、おありですから」

仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしません。人がいいと言えば、よくなるし、悪いと言えば、悪くなるんです。ちよつと吐くいきと、引くいきみたいなものなんです。おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、という事なんです。いるんでしよつね？」

「え？」

「いるんでしよつね？」

「私には、わかりませんわ」

「ぞう」

十日、二十日とお店にかよつてゐるうちに、私には、椿屋にお酒を飲みに来てゐるお客さんがひとり残らず犯罪人ばかりだという事に、気がついてまいりました。夫などはまだまだ、優しいほうだと思つようになりました。また、お店のお客さんばかりでなく、路を歩いている人みなが、何か必ずうしろ暗い罪をかくしているように思われて来ました。立派な身なりの、五十年配の奥さんが、椿屋の勝手口にお酒を売りに来て、一升三百円、とはつきり言ひまして、それはいまの相場にしては安いほうですので、おかみさんがすぐに引きとつてやりましたが、水酒でした。あんな上品そうな奥さんさえ、こんな事をたくらまなければならなくなつてゐる世の中で、我が身につしる暗いところが一つも無くて生きて行く事は、不可能だと思ひました。トランプの遊びのよつに、マイナスを全部あつめると、プラスに変わるといふ事は、この世の道德には起り得ない事ではしよつか。

神がいるなら、出て来て下さい！　私は、お正月の末に、お店のお客にけがされました。

その夜は、雨が降つていました。夫は、あらわれませんでした。夫の昔からの知合いの出版のほうの方で、時々私のところへ生活費をとどけて下さつた矢島さんが、その同業のお方らしい、やはり矢島さんくらい四十年配のお方と二人でお見えになり、お酒を飲みながら、お二人で声高く、大谷の女房がこんなところで働いてゐるのは、よろしくないとか、よろしいとか、半分は冗談みたいに言い合ひ、私は笑いながら、

「その奥さんは、どつこいらつしやるの？」

とたずねますと、矢島さんは、

「どつこにゐるのか知りませんがね、すくなくとも、椿屋のさつちゃんよりは、上品で綺麗だ」

と云ひますので、

「やけるわね。大谷さんみたいな人となら、私は一夜でもいいから、添つてみたいわ。私はあんな、ずるいひとが好き」

「これだからねえ」

と矢島さんは、連れのお方のほうに顔を向け、口をゆがめて見せました。

その頃になると、私が大谷という詩人の女房だといふ事が、夫と一緒にやつて来る記者のお方たちにも知られていましたし、またそのお方たちから聞いてわざわざ私をからかいにおいでになる物好きなお方などもありまして、お店はにぎやかになる一方で、亭主のご機嫌もいよいよ、まんざらでございませんでしたのです。

その夜は、それから矢島さんたちは紙の闇取引の商談などして、お帰りになったのは十時すぎで、私も今夜は雨も降るし、夫もあらわれそうもございませんでしたので、お客さんがまだひとり残っておりましたけれども、そろそろ帰り支度をはじめ、奥の六畳の隅に寝ている坊やを抱き上げて脊負い、

また、傘をお借りしますわ」

と小声でおかみさんにお頼みますと、

傘なら、おれも持っています。お送りしましょう」

とお店に一人のこっていた二十五、六の、痩せて小柄な工員ふうのお客さんが、まじめな顔をして立ち上りました。それは、私には今夜がはじめてのお客さんでした。

「はばかりさま。ひとり歩きには馴れていますから」

「いや、お宅は遠い。知っているんだ。おれも、小金井の、あの近所の者なんだ。お送りしましょう。おばさん、勘定をたのむ」

お店では三本飲んだだけで、そんなに酔ってもいないようでした。

一緒に電車に乗って、小金井で降りて、それから雨の降るまっくらい路を相合傘で、ならんで歩きました。その若いひとは、それまでほとんど無言でしたのですが、ほつりほつり言いはじめ、

知っているのです。おれはね、あの大谷先生の詩のファンなのです。おれもね、詩を書いているのですがね。そのうち、大谷先生に見ていただこうと思っていたのですがね。どうもね、あの大谷先生が、こわくてね」

家につきました。

「ありがとうございました。また、お店で」

「ええ、さようなら」

若いひとは、雨の中を帰って行きました。

深夜、がらがらと玄関のあく音に、眼をさました。れいの夫の泥酔のご帰宅かと思ひ、そのまま黙って寝ていました。

「ごめん下さい。大谷さん、ごめん下さい」

という男の音が致します。

起きて電燈をつけて玄関に出て見ますと、さっきの若いひとが、ほとんど直立できにくいくらいにぶらぶらして、

奥さん、ごめんなさい。かえりにまた屋台で一ぱいやりましてね、実はね、おれの家は立川でね、駅へ行ってみたらもう、電車がねえんだ。奥さん、たのみます。泊めて下さい。ふとんも何も要りません。この玄関の式台でもいいのだ。あしたの朝の始発が出るまで、ごろ寝させて下さい。雨さえ降ってなげや、その辺の軒下にも寝るんだが、この雨では、そうもいかねえ。たのみます」

主人もおりませんし、こんな式台でよろしかったら、どうぞ」

と私は言い、破れた座蒲団を二枚、式台に持って行ってあげました。

すみません。ああ酔った」

と苦しうに小声で言い、すぐにそのまま式台に寝ころび、私が寝床に引返した時には、もう高いが聞えていました。

そうして、その翌る日のあけがた、私は、あつげなくその男の手にいれられました。

その日も私は、うわべは、やはり同じ様に、坊やを背負って、お店の勤めに出かけました。

中野のお店の土間で、夫が、酒のはいつたコップをテーブルの上に置いて、ひとりで新聞を読んでいた。コップに午前の陽の光が当って、きれいだと思ひました。

誰もいなこのへ」

夫は、私のほうを振り向いて見て、
「うん。おやじはまだ仕入れから帰らないし、ばあさんは、ちょっといままでお勝手のほうにいたようだけど、
いませんか？」

卯うべは、おいでにならなかつたの？」

来ました。椿屋のさっちゃん顔を見ないとこのごろ眠れなくなつてね、十時すぎにここを覗いてみたら、いま
しがた帰りましたといつのでね」

それで？」

「涙っちゃいましたよ、ここへ雨はざんざん降っている」

「あたしも、こんどから、このお店にずっと泊めてもらおう事にしようかしら」

「いいでしょう、それも」

「そうするわ。あの家をいつまでも借りてるのは、意味ないもの」

夫は、黙つてまた新聞に眼をそそぎ、

「やあ、また僕の悪口を書いている。エピキュリアンのにせ貴族だつてさ。こいつは、当たっていない。神におびえる工
ピキュリアン、とでも言つたらよいのに。さっちゃん、ごらん、ここに僕のことを、人非人なんて書いていますよ。違
うよねえ。僕は今だから言つけれども、去年の暮にね、ここから五千円持つて出たのは、さっちゃんと坊やに、あ
のお金で久し振りのいいお正月をさせたからです。人非人でないから、あんな事も仕出かすのです」

私は格別うれしくもなく、

「人非人でもないじゃないの。私たちは、生きていさえすればいいのよ」
と言いました。